

諦めない強さ

全国にその名を知られた強豪、富岡第一中学校バドミントン部。東日本大震災は、彼らの生活も一変させた。慣れない土地での生活、短い練習時間、以前とは程遠い環境の中で、なぜ彼らは全国制覇という偉業を成し遂げることができたのか。彼らの頑張りが富岡、猪苗代の両町民に与えたものとは



写真上 男子団体の決勝戦、優勝を決めガッツポーズをする西豊選手(3年・右)と渡辺勇大選手(2年・左)。西選手はこの瞬間のことを「うれしすぎて覚えていない」と話した

Chapter 1

夢に向かって



8月に開かれた全国中学校体育大会バドミントン競技で、団体、個人ともに男女アベック優勝を果たすなど、輝かしい成績を残した猪苗代中学校特設バドミントン部。原発事故がなければ、その名は富岡第一中学校であるはずだった。震災や原発事故に翻弄されながら、それでも努力を続け、夢を勝ち取った生徒たち。彼らの全国制覇までの道のりを紹介する。

富岡町を離れて

東日本大震災後に起こった東京電力福島第一原発事故。この事故で警戒区域に指定された富岡町の富岡第一中学校は、生徒

全員が避難、転校を余儀なくされた。寮生活を送っていたバドミントン部の部員たちも、3月12日は川内村、次の日からは郡山市で避難生活を送った後、実家に帰るなどで一時離れ離れになった。

「震災後、もうバドミントンは続けられないかと思った」と当時を振り返るなど、不安を抱いていた部員たちも少なくなかった。しかし、その不安を払拭したのは、多くの人の支えや仲間が存在だった。

地元のジュニアチームや実業団が練習をさせてくれた。練習場所を探してくれたり、作ってくれる人もいた。シャトルや練習着などを提供してくれる人も

いた。たくさんの方が自分たちを支えてくれるおかげでバドミントンが続けられる。もう一度仲間たちと一緒にバドミントンがしたい。あのメンバーで戦って全国制覇し、支えてくれた人に感謝の気持ちを伝えたい。その思いは、日ごとに大きくなっていった。

猪苗代からリスタート

連携型中高一貫教育「双葉地区教育構想」の連携高である富岡高校のバドミントン部が猪苗代高校にサテライト校を設置したことで、中学生も猪苗代で活動することになった。

仲間と一緒に全国制覇を目指す



猪苗代中学校

菊池 芳次 校長

Kikuchi Yoshiji

彼らが転入してくるときは、学校や生活など、全く違う環境にすぐに溶け込めるのだろうかと心配もありました。しかし、それは取り越し苦労に終わりました。競技に対する意識の高い生徒たちは、そのほかの面でもきちっとしていました。迎える側になった本校の生徒も新しい仲間を歓迎していました。彼らの素晴らしい活躍は、猪中の生徒だけでなく、富岡と猪苗代の両町民、県民を勇気づけてくれた。これからも一歩一歩努力を重ね、活躍してほしい。



猪苗代中バドミントン部
元主将

五十嵐澄江 さん

Igarashi Sumie

私たちの新しい仲間になった特設バドミントン部。そのプレーを見るだけで自分たちのレベルアップになりました。そして何より、バドミントンという競技が好きだという気持ち、取り組む姿勢にすごくいい刺激を受けました。彼らは、競技を離れると自分たちと変わらない普通の中学生。一緒に騒いでいる仲間です。震災という悲しい出来事のおかげで知り合った私たちですが、彼らにはどんどん強く、有名になって福島を盛り上げてほしいです。

したい。部員たちの思いは同じだった。19人が猪苗代に集まり、猪苗代中学校から全国制覇を目指すことになった。転校後、生活リズムの違いなどに戸惑ったが、次第に慣れていった。

2カ月間のブランクを経て始まった本格的な練習。専用の施設があった富岡とは練習環境が違った。練習時間は格段に短くなった。カメラナや第2町民体育館に空きがなければ、他の学校の体育館、校舎の階段やフロアが練習場所になった。しかし、部員たちに不満はない。

「猪苗代の人たちは自分たちを好意的に受け入れてくれた。練習もほぼ毎日カメラナでできている。仲間がいて、練習場所もある。ここに来てよかった」。仲間と一緒にバドミントンができる、学校に通える幸せ。部員たちは、今まで当たり前だと思っていたことの一つ一つに感謝し、その時間を大切にして過ごした。

7月22、23日の両日、田村市で開催された県大会では、すべての種目で上位を独占。圧倒的な力を見せた。8月5日から7日までの3日間にわたり山形県鶴岡市で開かれた東北大会でも、全6種目を完全制覇するという快挙を成し遂げ、見事全国大会への出場を決めた。



全国大会で
試合を見守る
齋藤監督

猪苗代中学校特設バドミントン部

齋藤 亘 監督 Saito Wataru

全国大会は、終わってみれば6種目中5種目で優勝という結果になった。しかし、どれも今までに経験したことが無いような厳しい試合だった。

4月には活動の見通しすら立っておらず、2カ月のブランクを経て、猪苗代で練習できたのは約3カ月間だった。

生徒たちには、震災や練習時間が少ないことを言い訳にするな、ハンデだと思ふなと言ってきたが、やはり体力不足や試合経験不足を感じる場面が何度もあった。

それでも結果を残せたのは、精神面の成長が大きい。震災は大きな被害を与えたが、同時に精神面を鍛えてくれた。諦めないことや試合を楽しむ気持ちが大切だとあらためて教えてくれた。

震災前、富岡一中には約280人の生徒がいたが、現在は約130の学校に散り散りになっている。

今回の全国優勝のニュースは、そうした生徒たちや避難生活を送っている人たちのためにできる最高の報告だ。

何でもやればできる。
諦めない気持ちは大切だと思った
高嶋 道 選手(左)



ネームは猪苗代だが、富岡一と二つの看板を背負っていると思っていた
林 達也 選手(右)



たくさんの人のおかげでバドミントンができる。
そのことに感謝して頑張っていきます
大堀 彩 選手



震災を乗り越えて手に入れたメンタルの強さ
諦めない心を得られたのは大きかった
古賀 穂 選手

毎日練習ができるのはすごいこと。
感謝しています
田島 優乃華 選手(右)



友だちにもらったミサンガ
全中でもつけていました
渡辺 帆南 選手(左)

組と戦うという目標にはわずかに届かなかった。

男子ダブルスでは、全国大会初出場の高嶋道選手・林達也選手(共に3年)組が3位に入賞。優勝を狙っていた高嶋選手は、「林選手とは、2年生から一緒に組んでいるベア。優勝はできなかったが、初出場で3位という結果もうれしく思う」と話した。

同じく男子ダブルスに出場した優勝候補の西豊選手・渡辺勇大選手組は、団体戦の疲れが取れず、本来の動きができなかったがベスト8まで勝ち進んだ。

東日本大震災や東京電力福島第一原発事故による転校や練習環境の変化。それらの試練を乗り越えて、猪苗代中学校として出場した全国大会。終わってみれば全6種目中5種目で優勝という史上初の快挙を成し遂げた。彼らの活躍を支えたのは、震災や練習不足を言い訳にしない、何があっても絶対に諦めないという気持ち。王者、富岡一中時代に育んだ芽は、震災を乗り越え、猪苗代で練習をするうちにさらに大きく、強く育ったのだと信じていた。富岡一と猪苗代、二つの名前を背負って戦った生徒たちの姿は、全国の強豪に「王者健在」を強く印象つけたのではないだろうか。



いろいろな人を元気づけたかった。支えてくれた人たち、
家族のためにも勝ちたかった
東野 有紗 選手(左)

会場で応援してくれた父母たちに
感謝の気持ちを伝えたい。
応援はすごく力になった
渡辺 勇大 選手(右)



支えてくれたすべての人に感謝して、
その人たちのために頑張ろうと思った
西 豊 選手(左)

全国制覇の瞬間、全国に散り散りになっている
富岡一中の友だちの顔をよぎった
三橋 健也 選手(左)

チームをまとめることを第一に頑張った。
夢を諦めなかったから優勝できた
濱北 もも 選手(右)

地元に帰ると、知り合いが自分のために練習
場を作ってくれた。練習場所も探してくれた。
優勝して恩返しがしたいと思った
光島 理貴 選手(右)



Chapter 2

諦めない
それが



王者の
プライド

全国の舞台で見せた 王者のプライド

第41回全国中学校体育大会バドミントン競技は8月22日から25日までの4日間、滋賀県大津市の滋賀県立体育館で開催され、23日には男女の団体戦が実施された。

団体はダブルス2戦、シングルス1戦の計3戦で争われる。猪苗代は男女とも2回戦から登場、準々決勝から決勝まで、すべて2-1という接戦を制し、決勝では男子が聖ウルスラ学院英智を、女子が皇徳寺を下し、男女ともに優勝を果たした。

「団体での優勝はチーム全体の勝利。個人戦よりうれしい」とは古賀、濱北両主将の言葉。諦めない気持ちとチームワークでつかんだ勝利だった。男女団体を同一校が制したのは大会史上2校目。富岡一中時代から数えると、男子は二連覇、女子は2年ぶり2度目の全国優勝となった。

翌24日からの個人戦では、男子シングルスの古賀穂(3年)選手、女子シングルスの大堀彩(3年)選手が登場。昨年度準優勝の二人がその実力を遺憾なく発揮した。

古賀選手は準決勝、決勝と相

手に先行される展開。「スロースターターなので、スイッチが入るまでが…」と本人が語る通り、スイッチが入った後半に逆転で勝利。男子シングルスで初優勝を飾った。昨年決勝戦で逆転負けを喫し、悔し涙を流した大堀選手は、2回戦から決勝までの全試合をストリートで勝ち進んでの優勝。スピードを生かした、安定した試合運びは圧巻の一言。見事、昨年の雪辱を果たした。

同じく男女シングルスに出場した小林大吾選手(2年)はベスト32、仁平菜月選手(1年)はベスト16とそれぞれ健闘。下級生ながら次につながる活躍を見せた。

女子ダブルスでは、東北大会を制した濱北もも選手・東野有紗選手(共に3年)組が登場。

「先行されても諦めたら終わりだと思って頑張った。ベンチも諦めずに応援してくれた」と濱北選手。東野選手は、「足首のけがが不安だったけど、支えてくれるパートナーと優勝できてうれしい」と話し、諦めずに仲間と共につかんだ勝利を祝いあった。

同じく女子ダブルスに出場した渡辺帆南選手(3年)・田島優乃華選手(2年)組はベスト16。決勝で濱北選手・東野選手

道標

全国制覇のためには選手たちの並々ならぬ努力があった。しかし、それだけでは勝利を手にするとはできなかった。選手たちは知っている。支えてくれる存在の大きさを。だから努力を続ける。自分たちの頑張りが逆に誰かを支えることを知っているから

猪苗代中学校特設バドミントン部の全国中学校体育大会優勝報告会は9月2日、役場3階の正庁で開かれた。

齋藤亘監督からの成績報告の後、男子の古賀穂主将が

「震災から2カ月が過ぎ、猪苗代で活動を再開したが、最初は不安なことばかりだった。大震災があったころは試合に出られるかどうかわからない状況だったが、何とか大会に出場することができた。支えてくれた人たちに感謝したい。次の大会に目標を定め、今できることをやっていきたいと思う」とあいさつ。続いて女子の濱北主将が

「全中では選手とベンチが一緒にになり、苦しい時でも励まし合うことができた。ここに至るまでには、たくさんの困難があったが、支えてくれた皆さんのおかげで乗り越えることができた。この結果に満足せず、これから一層頑張っていく」と抱負を述べた。

震災によって多くのものが奪われたが、彼らは夢を持ち続け、それをかなえた。その姿は、富岡、猪苗代の両町民だけではなく被災地で生活するすべての県民にとって励ましになったに違いない。

9月2日、全国中学校体育大会優勝報告会後の記念撮影

Voice

富岡町民の励みに

富岡第一中学校の皆さんは、3月11日の震災後、通常とは違う生活と練習を余儀なくされています。しかし、その中で素晴らしい結果を出してくれました。

避難生活が続いている中、なかなか明るい話題もないというのが現状ですが、この話題はきっと僕だけではなく、町民の皆さんの励みになったのではないのでしょうか。



大和田豊一さん
(富岡町出身)

父母を代表してお礼を

東日本大震災の発生後、娘はいろいろな人の支えを受けて、猪苗代に転校しました。けがや困難を乗り越えての全国優勝。父母は子どもたち以上にうれしかったと思います。私も涙が止まりませんでした。体育館の使用などで協力してくれている猪苗代の皆さんや学校には父母を代表してお礼を言いたいです。ありがとうございました。



東野洋美さん
(北海道出身)
(東野有紗選手の母)

取材を終えて

原発事故後の混乱が選手たちの心を与えた影響は計り知れない。焦りもあつただろう、いらいだちもあつただろう、しかし、彼らはそれを感じさせない。

名門富岡一中で培ってきた実力、逆境に負けなかった努力と強い心。それ無くしては全国制覇は成し得なかった。しかし、それだけで全国制覇ができたかどうかは分からない。

一緒に頑張ってきた仲間もいれば、新しい友だちもいる。少しでもいい環境を支えてくれた先生、親や周りの大人もいる。わずかずつではあるかもしれないが、それらが一つになって困難を乗り越える強い力になったのではないだろうか。

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方の沿岸部。その復興には内陸部の協力が不可欠であるように、私たちは支え合って生きている。

仲間や周囲と支えあい、決して諦めず、逆境を乗り越える強い心でつかんだ優勝旗。この優勝旗は福島県の、古里の復興の道標になるということは言うまでもない。

特集 諦めない強さ 終わり
(大会写真提供 高嶋誠司氏)

5月8日、初めて家に来た子どもたちは、表情も硬く、不安な様子でした。富岡にいたころのようにリラックスして生活できるよう、別棟を全部寮にしました。

猪苗代中学校の生徒たちも転校生を暖かく迎え入れたようで、猪苗代に来て初めて練習が休みになった時、もう一緒に遊びに出かけていました。

も、選手たちは「優勝して帰ってきます」と言つてバスに乗り込んでいました。約束を守つての全国制覇は、私たちもうれしい。よくやってくれたと思います。8月30日には全国優勝後初めて全員が揃ったので、バーベキューパーティーでお祝いしました。

競技意識の高い子どもたちに関わることは、自分たちにとっても非常にいい刺激になります。私たちのほうが感動をも

らっているくらいです。これからも彼らが安心して競技に臨めるよう影から支えていきたいです。



選手たちの宿泊施設
「あるばいんロッジ」のオーナー

平山眞さん(左)、妻のとし子さん(中央)、次男の武さん(右)